

櫻井本『春日左抛御前法楽独吟百韻』訳注（五）

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうちの最初の百韻である『春日左抛御前法楽独吟百韻』は、宗祇が五十六歳の時に、室町幕府將軍家の連歌会に初めて参加するにあたり、左抛社に祈念するところあつて詠んだ百韻であつた。この百韻から宗祇の百韻の手法を説明すべく、『春日左抛御前法楽独吟百韻』の訳注を試みることにした。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の「春日左抛御前法楽独吟百韻」である。対校本に、①北海学園北駕文庫本（16―28―16―2、D 613、写一冊、1000002643）、②北海学園北駕文庫本（16―34―4―8、D 601、写一冊、1000002671）、③大阪天満宮文庫延宗本（359―11―4―14、写一冊、1000201215）、④京大平松文庫春日末社左「ナゲ」法楽（マイクロフィルム番号MNO: P515）、⑤東大国文研究室蔵『連歌名句』（中世12・7―9）、⑥静嘉堂文庫連歌集書51所収本、⑦大阪天満宮文庫蔵長松本（『大阪天満宮文庫連歌書目録』れ5・11）、⑧天理図書館蔵本（『綿屋文庫連歌俳諧書目録第一』れ4・2―24）を使用し、校異を示した。①③⑤は国文学研究資料館の紙焼き写真、④は京大図書館のHPを参照した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻の形で示し「愛知県立大学日本文化学部論集」第九号（二〇一八・三）に掲載しており、適宜参照されたい。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

（三折・裏・十二） 鳴く鳥を空音になせば声添ひて

七六 とどめがたきは別れゆく人

【校異】なし

【式目】 雑 人（人倫）

【語釈】 ○とどめがたきは…とどめることがむずかしいのは。「吹く風にたへぬこずゑの花よりもとどめがたきは涙な

りけり」（千載集・恋四・「法性寺入道前太政大臣、内大臣に侍りける時、家にて寄花恋といへるころをよめる」・849・源雅光。「なみたにもとめかたきはわかれにて／やかてぎえぬるそてのおもかけ」（難波田千句第二百韻・15／16）。○別れゆく人：「鳥トアラバ、暁、：別」「恋の心、別」（連珠合璧集）。「おぼつかなしやわかれ行人／今この心ことのはいつかみん」（那智籠（北野天満宮本）・744／745）。

【付合】前句の「鳥」から、明け方の別れの様子を付けた。別れの時刻を知らせる鳥の声を聞くまいと無視しても、夜が明けるにつけて鳥は次第に鳴きつゝのり、その声の様子から、別れを意識せざるをえない。

【一句立】おしとどめることが難しいのは、別れていく人なのである。

【現代語訳】別れを促すかのように明け方に鳴く鳥の声に気づかないふりをして、さらに鳥が鳴きしきつて、別れていくあの人を、もうとどめることは難しい。

（三折・裏・十三）とどめがたきは別れゆく人

七七 限りある道ならばなど生まるらん

【校異】なし

【式目】雑（述懐）

【語釈】○限りある道：いづれ寿命が尽きる人生を言う定型句。「限りある道こそあらめ廻りあふ日数にだにもおくれぬるかな」（草庵集・哀傷・1339）。「このはかつちりくさそかれゆく／ほとけにもかきりあるみちはさたまりて」（文明十四年万句第五千句第八百韻・14／15）。○など生まるらん：どうして生まれてしまったのだろうか。「こし跡の世、のむくひもくやしきに／おもひありてはなと生るらん」（宝徳四年千句第七百韻・19／20・日晟／与阿）。

【付合】前句の「別れ」を死別ととり、命のはかなさを思う句を付けた。

【一句立】寿命に限りがある人生の道ならば、どうして生まれてしまったのだろうか。

【現代語訳】 この世にとどめておくことが難しいのは、死に別れていく人だ、命に限りがあるのが人生の道ならば、どうして生まれてしまったのだろうか。

(三折・裏・十四) 限りある道ならばなど生まるらん

七八 水もかへらず火も消えにけり

【校異】 水 ②⑤鳥

【式目】 雑 水(水辺・用) 「波 水 氷室(以上、如此類水辺用也)」(連歌新式追加並新式今案等)

【語釈】 ○水もかへらず…水も戻らず。覆水盆に返らずの故事をふまえるか。○火も消えにけり…火も消えてしまうことよ。水や火の例えを使うことで、逆に永遠の時間を詠む歌に「万代と亀井の水もともす火も消えずこほらぬ法の寺かな」(草根集(国歌大観本)・井氷・546)がある。

【付合】 付句において、「限りある道」が世のすべてのものたどる道であることを具体的に示した。

【二句立】 こぼれた水も元に戻らず、火も消えてしまうことよ。

【現代語訳】 生命に限りがあるのが人生の道ならば、どうして生まれるのだろうか。水だってこぼれば元に戻らず、燃える火もいずれ消えてしまうことよ。

【考察】 「鳥もかへらず」という本文だと、飛び立って帰らない鳥の様となる。本百韻には、「鳥」は第23句、第62句、第75句にある。『連歌新式』では、鳥と鳥は可隔五句物であるから、ここは「鳥」は不適。

(名残折・表・一) 水もかへらず火も消えにけり

七九 かきためし藻くづを波のまた引きて

【校異】 なし

【式目】 雑 波（水辺・用）

【語釈】 ○かきためし：搔いて集め重ねた。「搔きたむ」は木の葉などにも使う。「やどりかる入江のむらの寒き日に藻くつかきたき明すたひ人」（河越千句第十百韻・43／44・満助／長敏）。○藻くづ：海や川の水中にある藻の屑。はかないもののため。底青くなりぞしぬらし五月雨にもくづながるる山河の水」（新後拾遺集・夏・五月雨・前右大臣）。

【付合】 前句の「水」から水辺の情景を、「火」から藻屑をたく火を想起し、そのはかなさを付けた。

【一句立】 かき集めた藻の屑を波が再び引きさらっていつて。

【現代語訳】 水も返らず、火も消えてしまったことよ。かき集めてためた藻の屑を波が再び沖へとさらっていつて、何もなくなってしまうた。

（名残折・表・二） かきためし藻くづを波のまた引きて

八〇 清き渚に残る松風

【校異】 松風 ①春風^{松風イ}

【式目】 雑 渚（水辺・体）

【語釈】 ○清き渚：澄み切った渚。「伊勢の海のきよきなぎさはさもあらばあれわれはにこれる水にやどらん」（玉葉集・釈教・2617・善光寺阿弥陀如来）。○松風：波が打ち寄せる近くに生える松を通り過ぎる風。渚は、波音と松風の音が重なる場所となる。「いはがねによせてはかへる波のままなほおとのこすいその松風」（玉葉集・雑二・題知らず・藤原親範・2119）。「沖つ波よするひびきを残しても浦になるをの松風ぞ吹く」（新後拾遺集・雑上・権中納言為重・1282）。「松風トアラバ、波」（連珠合璧集）。和歌においては、「藻くづ」は和歌の浦と共に、歌言葉にイメージさせて使われることが多かったが、宗祇の頃の和歌からは、浜辺の情景に、「松」が加わる歌が見られるようになる。

「住吉の松の落葉にかきそへよつくしの海のもくづなりとも」(春夢草・雑下・護道内藤内蔵助つくしより連歌をみせ侍りし時、包紙に・2006)。

【付合】付合では、集めた藻が波にさらわれ、渚がきれいになった情景を詠む。

【一句立】清らかな水の渚に残っている松風の音。「渚」から「無き」、「松風」から「待つ」が思われ、喪失と希求の意を感じさせる句。「たづぬべき人もなぎさのすみのえにたれまつかぜのたえずぞふくらし」(住吉物語(真鍋本)・姫君・103)。

【現代語訳】搔いて集めた藻の屑を波が再びさらっていつて、きれいになった渚には、松風だけが吹いている。

(名残折・表・三) 清き渚に残る松風

八一 月白き雲井をたづやしたふらん

【校異】 たづや ①雀のヤ ③⑥雀や

【式目】 秋(月) 夜分(月) たづ(動物) 月(可隔三句物) 鳥に獣(可隔三句物) 鳥与鳥(可隔五句物)

【語釈】 ○月白き：月がしらじらと光る様。いずれの季節にも使い、宗祇も多く詠んでいる。「月しろきあしまになむ舟人の心も見えてたづのなくこゑ」(雪玉集・雑・葦間鶴・2285)。「春行水と桜なかるゝ月白く浮ふ霞に影更て」(熊野千句第一百韻・2/3・盛長/心敬)。「をちかた人を送る秋かせ/月しろき山路に駒の音はして」(老葉(再編本)・旅連歌・649/650)。○雲井：雲のかかる空。「おのかよはひのたかさこの松/はるかなる雲居のたつのこゑさひて」(三島千句第七百韻・32/33)。○たづ：鶴つるの歌語。「たづトアラバ、雲井」(連珠合璧集)。「雲るになりぬたつのなくこゑ/すゝしくも松よりのほる月ふけて」(三島千句第二三韻・82/83)。「霜あさの月にたつなく雲る哉」(宇良葉・冬・392、萱草・冬・638)。○したふらん：慕わしく思っているのだろう。「和歌の浦に道まなつるの鳴声や雲井におなし友したふらむ」(貞敦親王御詠・雑動物・785)。

【付合】松風を残して去ったのは、渚にいた鶴の姿であったことを説明した付合。「松」「たづ」と長寿の題材で続けるが、喪失の感情が表現されている。

【二句立】月が白く光る空を鶴は恋しく思っているのだろうか。

【現代語訳】清らかな渚には松吹く風が残っているだけで、鶴の姿もない。月のしらじらと光る空を慕って飛んでいったのだろうか。

（名残折・表・四）月白き雲井をたづやしたふらん

八二 枕の上はただ秋の霜

【校異】なし

【式目】秋（秋の霜） 枕（夜分） 霜（降物・可隔三句物）

【語釈】○枕の上…寝ている枕の上には。「あり明の空にをくる旅人／打はらふ霜の枕に秋ふけて」（葉守千句第一百韻・6／7・宗長／惠俊）。○秋の霜…秋に降りる、早い霜。月と霜はその白さが共通する。「霜トアラバ、月」（連珠合璧集）。「秋の霜しろきをみればかささぎのわたせる橋に月のさえける」（後鳥羽院御集・月・1637）。旅の枕に降りる霜に關しては、「旅ねするくさのまくらにしもさえてあり明の月のかけぞまたる」（山家集・寒夜旅宿・516）、「思ひやる枕の霜もさえはてて都の夢もあらしこそふけ」（拾遺愚草・2885）がある。連歌では「かね聞し今夜のたひねあけ過て／見ればまくらの霜むすひけり」（享徳二年千句第三百韻・31／32・量阿／賢盛）。

【付合】秋の第二句目。付句に霜の置く「枕」を入れることで、旅寝のイメージを出した。付合では、振り仰いだ空から、旅寝の床に目を落とす、天から地へと移動する視線が感じられ、月の光、鶴の姿、降りた霜と、重ねることで、空も床もしらじらと寒く冷えた印象を与えている。

【二句立】枕の上にはただ秋の霜が置いているばかりだ。

【現代語訳】 空には月がしらじらと光っている。鶴はその空を慕って飛んでいったのだろうか。私の寝ている枕の上には、ただ月ならぬ秋の霜が白く置いてあるばかりだ。

(名残折・表・五) 枕の上はただ秋の霜

八三 敷く袖の露もたまらず野は枯れて

【校異】 しく袖の ③しき妙くの ⑦しきたへの 枯て ②⑤暮て

【式目】 秋(野は枯れて) 夜分(敷く袖) 露(降物・可隔三句物) 袖与袖(可隔五句物)

【語釈】 ○敷く袖：眠るために敷く衣の袖。「露しろく成月のさひしさ／敷袖になみたの数や積るらん」(顯証院会千句第十百韻・38／39・忍誓／俊喬)。「夕の雨そ松に残れる／敷袖に岩のしつくの落やまで」(葉守千句第六百韻・12／13・恵林／宗祇)。○露もたまらず：露もたまることなく。風が吹きすぎることによって、露がこぼれ落ちる。「吹く風に露もたまらぬくずのはのうらがへれとは君こそ思へ」(山家集・恋百十首・1335)。「露もたまらず葛のうら風／帰るさの暁起の袖ぬれて」(菟玖波集・恋連歌下・1986／1987・後深草院弁内侍)。「露もたまらぬあしのかり庵／いかにぬむあきはしくれのするか山」(三島千句第十百韻・71／72)。○野は枯れて：野は枯れていつて。露を散らす秋風が吹くにつれて蕭条たる枯野になっていくさまが詠まれる。和歌では管見に入らず、心敬の頃の連歌から多く見られてくる表現。「かみすちかはるすゑの秋かせ／露霜におとろかくれの野はかれて」(享徳二年千句第三百韻・44／45・心敬／量阿)。「はやきり／す袖たのむ声／露の暮霜の朝に野は枯て」(老葉(再編本)・雑連歌上・1101／1102)。

【付合】 前句の「霜」に「露」が、「枕」に「袖」「敷く」が相對し、呼び込まれる。付句によって、露もこぼれてとどまることがないほどの風が吹き続け、野原は枯れ果てていき、付合全体で季節は冬へと向かう。上下の視線の移動が感じられた82、83句から、84句では、新たに風が示唆された。時の経過を示唆する、目にみえない水平方向の動きが思われる。

【一句立】敷く袖に置く露もたまらずに散り、野は枯れ果てていつて。

【現代語訳】私の枕の上には、ただ秋の霜が置いているばかり。旅の宿りに敷く袖の露もたまることなくこぼれてしまふほどに風が吹いて、野は一面の枯野となっていて。

(名残折・表・六) 敷く袖の露もたまらず野は枯れて

八四 朝行く道はささそよく音

【校異】は ③④⑦⑧に そよくをと ①そよくおとイ分るさと ⑥わくる里

【式目】 羈旅(道) 笹(植物)

【語釈】○朝行く道：朝旅立って歩む道。「あさゆくみちに鶯そなく／春日さす垣ねの野への霜とけて」(表佐千句第二百韻・2／3・紹永／専順)。「旅の心、道」(連珠合璧集)。○笹そよく音：笹の葉のそよく音。「笹の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ別れ来ぬれば」(万葉集・巻二・133・柿本人麻呂)。「草枕夕露はらふささの葉のみ山もさやにいく夜しをれぬ」(新続古今集・羈旅・正治二年百首歌たてまつりける時・973・藤原定家)。「ある、栖はた、秋のかせ／篠そよく山の下道露落て」(年次不詳何人百韻「春深し」・42／43・道印／宗祇)。

【付合】、前句の旅寝の情景から、夜分を離れ、朝に時をすすめる。

【一句立】朝、旅立って歩いていく道には笹がそよく音が聞こえる。

【現代語訳】敷く袖に置く露もたまることなく風に散り、野は枯れていつて、朝に歩いていく道では、笹の葉がそよく音が聞こえる。

【考察】宗祇の『万葉抄』は、巻二、133番の人麻呂歌を「さゝの葉はみ山もさやにみたれとも我はいもおもふわかれきぬれば」とし、「私」云、此歌は妹に別て太山などに旅のやとりしてよめる歎。篠の葉そよぎ打乱であれとも、我はたゝ妹を思とよめり。此歌末の集に乱るめりと入れり。惣して萬葉其外の古歌少つゝなをして入らるゝ事習也。乱る

めりの時の心は、打みたれてあるをみるにも、吾は妹おもふといふ心なるへし」と注する。旅寝して笹の葉音に恋人を思うという歌の理解は、八四句から八五句へと見られる展開にも合致する。

(名残折・表・七) 朝行く道は笹そよぐ音

八五 とふもうしこの一ふしに名や立たむ

【校異】なし

【式目】恋(とふ・名や立たむ)

【語釈】○とふもうし…訪れるのもつらい。恋人を訪れるのは幸せなことのはずだが、それを「憂し」とする意外さを初五で強く打ち出す。「かゝるなさはありてなせん／なくさめてよそのかへさにとふもうし」(芝草内連歌合(天理本)・2850/2851)。○この一ふし…この一度の逢瀬。「伏し(伏す)」は横になり寝ること。ここは恋人との一度の逢瀬をさし、「伏し」と「節」(笹の幹の中にある区切り)を掛けている。「篠トアラバ、ふし」(連珠合璧集)。「人しれずわれのみよわきころかなこのひとふしぞかざりと思ふに」(風雅集・恋四・康永二年歌合に、恋終を・1275・院御歌)。「ささのはのさやぐ霜夜は水ぐきのをかのやかたにふしぞわびぬる」(夫木抄・宝治二年百首御歌・13292・後嵯峨院御製)。○名や立たむ…評判が立つだろうか。「月ゆゑに花をしまぬ名やたたむ雲吹きはらふ風をまづみる」(三井寺山家歌合・六番左・春月・11・観俊)。

【付合】「笹」の縁で「節」を付け、「節」と「伏し」を掛け、恋の句境に変化させた。

【一句立】あの人を訪れるというのも、つらく思われることだ。この一度の逢瀬で、私があの人に恋しているという評判が立ってしまうだろうか。

【現代語訳】朝に進んで行く道には、笹のそよぐ音が聞こえている。思えばあの人を訪れるというのも、つらいことだ。笹が、そよぐ一節の葉の音によってそれとわかるように、この一度の逢瀬で、私があの人に恋をしているという

評判が立ってしまいうだろうか。

【他出文献】老葉(吉川本) 915/916

(名残折・表・八) とふもうしこの一ふしに名や立たむ

八六 なれずは何を身に思はまし

【校異】なれすは ①なるれは 何を ③何に ④猶本 身に ③身を

【式目】恋(思はまし) 身(人倫)

【語釈】○なれずは…そのことに馴れないならば。「かきたえてこぬこそかはるはしめなれ／なれすはなにかひとをし
たはむ」(看聞日記紙背何人連歌「うのはなは」(永享九年四月二十五日)・19/20)。○身に思はまし…心に思い悩も
うか。

【付合】「訪ふ」ことで、「名が立つ」状態になり、そのことに「馴る」と、どのように自分はなっていくのかと思
めぐらす句を付けている。

【一句立】これに慣れないのならば、一体何をこの身に思い悩むというのか。

【現代語訳】あの人を訪れるのもつらいことだ。この一度の逢瀬で恋の評判が立ってしまうのだろうか。噂されるこ
とに馴れないままだとしたら、何を思い悩むことになるのだろうか(馴れてしまえば、悩まないのだ)。

(名残折・表・九) なれずは何を身に思はまし

八七 面影もよしさは今はとまるなよ

【校異】も ①よ

【式目】恋(面影) 面影(只一、花・月などに二)(一座二句物)

【語釈】○面影……ここは恋人の顔かたち。夢に見たり、会っていない時に、常に心に思いついていたりする。「さめてこそ夢のうらみもかなしけれ／おもかけはかりなにとまるらん」(宝徳四年千句第十百韻・85／86・宗松／利在)。

○よしさは……もういい、それでは。「おもひのつゆをなに、かけまし／かこたしよよしさはしけれわすれ草」(新撰菟玖波集・恋連歌上・1875／1876・印孝法師)。○(面影)とまる……恋人の面影が脳裏から離れないこと。「おもかけとまるきぬく／の月／心なと君かあきをはやとすらむ」(三島千句第十百韻・34／35)。

【付合】面影が先立つことに馴れないまましていると、どれほど悩むことであろうかと類推し、恋の苦しさに、物思いの種である恋人の面影を脳裏から消そうとする。

【一句立】面影も、もうよい、今となってはとどまってくれるな。

【現代語訳】あの人の面影がいつも心に浮かぶことに慣れていないならば、一体何を思い悩むことだろう。恋しい人の面影であっても、もうよい、今となっては脳裏にとどまってくれるなよ。

(名残折・表・一〇)「面影もよしさは今はとまるなよ

八八 鏡に年ぞうつりもてゆく

【校異】にとしそ ①に年を^{そい} ⑥のかけの ゆく ⑥行^{きぬイ}

【式目】雑

【語釈】○鏡に年ぞうつり……鏡に映った自分の顔から、年齢(を重ねたこと)がわかること。鏡に映った自分の顔に老を感じるという発想はよく見られる。「鏡トアラバ、面影、……うつる」(連珠合璧集)。「かからしと年をか、みにうたかひて／人のうへにも身をそおとろく」(表佐千句第三百韻・71／72・宗祇／重阿)。「くれ行かけにつもるしら雪／我年の末そかなしきますか、み」(行助句・1297／1298)。○うつりもてゆく……映りながらだんだんと時がすぎていくこと。ここは「映り」と「移り」を掛ける。「年月ぞめぐりもあはでうつりゆく市の中なるかがみならねば」(草庵集・

恋下・彈正尹親王五首に、寄鏡恋・106。「はるのきてまづさくむめのにほひよりうつりもてゆくさくら山ぶき」(伏見院御集・春植物・506)。「うつりもてゆく山くくの雲／花そうきおもへはちらぬかけもなし」(萱草・春連歌・210／211)。

【付合】恋しい人の面影が鏡に映るというイメージを詠む歌は多く、そのイメージから「面影」に「鏡」を付ける。「面影トアラバ、鏡」(連珠合璧集)。「影にだに見えもやするとたのみつるかひなく恋をます鏡かな」(後撰集・恋四・805・詠み人知らず)。しかしこの付合では、一句の中では、鏡に映るのが自分の風貌だとしており、強い口調の前句を、自分の風貌が以前と変わってしまったからもう見たくないという思いとして読んでいる。「ます鏡そこなる影にむかひるて見る時にこそ知らぬ翁にあふ心地すれ」(拾遺集・雑下・旋頭歌・565・詠人しらず)。

【二句立】鏡に年齢相応の面影が時と共に映り、過ぎていくのだ。

【現代語訳】私の容貌も、もうこんなふうになつた今となつては、脳裏にとどまるなよ。鏡にはちゃんと年齢相応の面影が映り、それは時と共にしだいに衰えているのだから。

(名残折・表・一一) 鏡に年ぞうつりもてゆく

八九 山鳥のおろのはつ雪降りそひて

【校異】そひて ①そひて ②⑤そめて ⑤東大國文研蔵『連歌名句』では、頭注に「○山鳥の初尾ハツポの鏡／○おろの初尾共云／尾の中の一の長き尾を初尾と云也」と記す。

【式目】雑(頭雪ニ非降物。非冬。ニ) 山鳥(動物・同前(非山類。山字に五句可嫌之。))

【語釈】○山鳥：雉に似た、銅褐色の鳥で、雄は尾が極めて長く体長が一メートル以上になる。「山鳥の尾ろのはつを」に鏡掛けとなふべみこそ汝に寄そりけめ」(万葉集・巻十四・3468)から、山鳥と鏡が寄合である。「山鳥トアラバ、かゞみ」(連珠合璧集)。ここから「山鳥のはつをの鏡」、「山鳥のをろの鏡」という表現が早く生まれている。「山ど

りのはつをのががみかけふれでかげをだに見ぬ人ぞこひしき」(散木奇歌集・恋上・111)。「やまどりのをろの鏡にあらねどもうき影みてはねぞなかれける」(土御門院御集・鳥名十首・349)。「山鳥のをろのががみやくもるらんかすみをかけていづる月影」(延文百首・春月・251・二条为重)。同じく「葦引の山鳥の尾のしだりをのながし夜をひとりかもねむ」(拾遺集・恋三・778・人まろ)により、「山鳥の尾」が、「長き夜」から「遅き日」「長き日」とも結びつき、³⁴⁶⁸歌と混じりあい、鏡と共に詠まれるようになっていく。「かすみへたてゝとをきいにしへ／山鳥のかゝみおろの遅日に」(看聞日記紙背何船百韻「あきかせの」・74／75・記載なし／明堯)。「なかき日は山鳥の尾のかゝみかな」(葦草・春連歌・遅日を・66)。なお、『愚句老葉』の自注から、宗祇は、万葉³⁴⁶⁸番歌の「尾ろ」を雄、「はつを」を長い尾と考えているようである。○初雪：雪の寓意として「白髪」の意が込められている。「雪トアラバ、…鏡の影」(連珠合璧集)。「消えやらぬ頭の雪のます鏡／水に向へば我ぞうたかた」(竹林抄・雑連歌上・1257・智蘊)。「したりけり遠山鳥のはつおはな」(心玉集・829)。「長月や山鳥の尾の初時雨」(竹林抄・発句・1776・智蘊、新撰菟玖波集³⁷⁹³)。「くもれたゝふり行陰のます鏡／遠山鳥のはつゆきのくれ」(永原千句第七百韻・37／38・紹永／宗祇)。

【付合】万葉歌³⁴⁶⁸から、「鏡」に「山鳥」、さらに「山鳥のおろのはつゝ」から、「初雪」とつなぎ、新たな熟語を詠みこんでいる。

【二句立】山鳥のはつ尾に初雪が降り加わっている。

【現代語訳】鏡にはちゃんと年齢相応の面影が映り、それは時と共にしだいに衰えている。頭髮には、山鳥のはつ尾ならぬ、初雪、すなわちこのところ生え出した白髪が次第が増えてきているのだ。

【他出文献】老葉(吉川本) 629／630、老葉(再編本(毛利家本)) 565／566 (565句「かゝみにとしそつもりもて行」) 老葉(宗訊筆本) 597／598 愚句老葉 676／677

『愚句老葉』

六七六 かゝみにとしそつりもて行

六七七山鳥のおろの初雪降そひて

自 山鳥のおろの初尾と云事にて、鏡を寄合に引かへたる也、おろは雄也、初尾は長き尾なり

長 景気とみゆ、山鳥のおろとは雄の事にや、尾に鏡あると見ゆ

『老葉注』

五二二 かゝみに年そうつりもて行

五二三山とりのおろの初雪ふりそひて

前句、鏡に年のはやくうつりかはるをしる心也。付る所

は、山鳥のかゝみと申事有、本哥ニ山鳥のおろのはつおに鏡かけ

【補説】

万葉³⁴⁶⁸歌の「山鳥の尾ろのはつをに鏡掛け」は、歌学において『俊頼髓脳』、『奥義抄』、『袖中抄』、『和歌色葉』、『八雲御抄』などにとりあげられる難義歌である。「山鳥の尾ろのはつをに鏡かけ」には、二説、山鳥が鏡に影のうつろのを見て舞うという説と、山を隔てて寝る雄と雌の山鳥のうち、暁に雄鳥のはつをに雌鳥の影がうつろのをみて雄鳥が鳴くことをいうという説があり、さらに細かく「はつを」も雄鳥のことか尾のことか語義が分かれる。例えば、『袖中抄』では、「をろとは雄鳥なり」とした上で、「はつを」をも「なほ雄鳥と心得べし」となすが、『八雲御抄』は「おろのはつおはたゝの尾也」とする。また「はつお」には異文「ながを」があり、和歌でも「山鳥のおろのながを」のかがみにかかる心を見るやとほづま（万代集・思不言恋・1273⁵・藤原仲実）、「夜とともにみだれてぞおもふ山鳥のをろのながをのながきつらさ」（遠鳥御歌合・久恋・113・女房（後鳥羽院））などの例があった。

『愚句老葉』宗祇自注では、「山鳥のおろの初尾と云事にて、鏡を寄合に引かへたる也、おろは雄也、初尾は長き尾なり」と注している（↓【他出文献】）。なお、宗祇『萬葉抄』は、万葉³⁴⁶⁸歌を、第二類第一種本において上二句（「や

まどりのをろのはつをに」を掲出するが、第二類第一種本は成立年未詳で扱いは慎重を要する（両角倉一氏『宗祇連歌の研究』）。

なお、この句の「はつ雪」であるが、付合では白髪を形容しており、式目により「頭雪」は非冬であることから、雑の第二句目とみなしておく。

（名残折・表・一二） 山鳥のおろのはつ雪降りそひて

九〇 へだつる峰もしるぎ浮雲

【校異】も ①に⑥に⑧の しるぎ ③しろぎ ④知き ①⑥白き ⑦しろぎ

【式目】雑 峰（山類・体） 浮雲（簞物） 雲与雲（可隔五句物）

【語釈】〇へだつる峰：隔てている峰々。山鳥は雌雄が峰を隔てて寝るといふ逸話がある。「山鶏：みねをへだて、よる雌雄ふすととりなり。さればひとりぬる心にもよせてよめるなるべし」（和歌童蒙抄）。「夜は尾上に遠き鹿の音／山鳥の霧にも中やへたつらん／鏡のかげのかはるしらかみ」（応永二十九年二月二十五日何物百韻・30／31／32・重有／御（貞成親王／重有）。〇しるぎ浮雲：くつきりと浮かぶ雲。「浮雲」は数多く見られる表現だが、この句は和歌でも連歌でも管見に入らない。「白き浮雲」でも同様である。「外山おろすあらしのすゑもこほるらし雪げにかはるみねのうき雲」（続門葉和歌集・冬・422・権僧正頼嚴）。「小塩山みねの浮雲風さえて時雨れしまつにふれる初雪」（芳雲集・雑・小塩山・508）。

【付合】雪山の情景描写となる。

【二句立】隔てている峰に、くつきりと浮雲がかかっている。

【現代語訳】山鳥のおろのはつ尾ならぬ初雪が降り加わって、（山鳥を）隔てている峰にもくつきりと浮雲がかかっている。

【備考】「白雲」が第九七句にあるが、式目には抵触しない。

（名残折・表・一三） へだつる峰もしるき浮雲

九一 三笠なる宮居にひとし鹿島がた

【校異】鹿島かた ②⑤鹿鳴て

【式目】神祇（宮居）

【語釈】○三笠なる…三笠にある。三笠は、奈良県奈良市春日野町にある春日神社（春日大社）の東方の御蓋山。鹿島から来た武甕槌命が御蓋山の山頂「浮雲峰」に降りたとされる。「我屋戸はみやこのみなみしかのすむ三笠の山のうきくものみや」（春日権現験記絵・第一巻・春日大明神）。「鹿島よりかせきにのりて千早振三笠の山に浮雲の宮鹿島より白鹿にのりて春日にうつり給ふ時、明神の御歌なり」（兼載雑談）。「春日さすかけの佐保川春日山／三笠の岑の雲の浮波」（初瀬千句第八百韻・59／60・宰相／重棟）。「日数ふる春は春日の神まつり／かすみ立たる浮雲の宮」（長祿三年千句第三百韻・79／80・通三／共家）○宮居：神が鎮座している場所。神社。○鹿島がた：鹿島神宮（茨城県鹿嶋市宮中）側。鹿島神宮も武甕槌神を祭神とする。「春日三笠は神の御所／船遠き浦はかしまのあまの原」（至徳以前「ゆきませの」何路百韻・60／61・聖／侍）。

【付合】前句の「峰」「浮雲」を、鹿島から来臨した武甕槌命の降りた御蓋山の浮雲の峰ととり、三笠を呼びこんだ。

【一句立】三笠にある神の社、春日神社と鹿島の方、鹿島神宮とは同じ神なのだ。

【現代語訳】隔てている峰にはつきりした浮雲がかかっている。その浮雲の峰におりられた三笠の神社の神は、鹿島神宮の神と同じ神なのだ。

【備考】宗祇が句を奉納した左抛社がある春日神社に関して、地理的歴史的に詠む。このあたりから、春日の法楽という目的を詠み入れようとしているか。

(名残折・表・一四) 三笠なる宮居にひとし鹿島がた

九二 神やあまたにかけむかふらん

【校異】 あまたに ⑦□またに (□は空白) かけ ③うけ ⑦か^{う歌}け

【式目】 神祇(神) 神(一座三句物) 神祇与神祇(可隔五句物) 积教与神祇(可隔五句物)

【語釈】 ○あまたに…: たくさんの人に。○かげむかふ…: 影向。神仏が仮の姿をとって人々の目の前に現れること。「神かさやよるへの水にうつるほし契ありてや影むかふらん」(草根集・永享元年七月七日詠・1266・北野梅松院の女)。

【付合】 付句は大和国と常陸国それぞれに武甕槌命が鎮座し、影向していることについて詠む。

【一句立】 神は多くの人の目の前に現れているのであろうか。

【現代語訳】 鹿島の方の社は、三笠の社に、社神が等しい。神は多くの人の目の前に現れているのであろうか。

(名残折・裏・一) 神やあまたにかけむかふらん

九三 ねがふてふ心は人に定まらで

【校異】 ねかふ ③ね^{いの}かふ

【式目】 雑 人(人倫)

【語釈】 ○ねがふてふ…: 願うという。

【付合】 「神」に「人」を相対させて付けている。

【一句立】 願うという思いは人ごとに決まっているわけではなく。

【現代語訳】 神は多くの人の目の前に現れているのであろうか。願うという思いは人それぞれで、どんなものか決まっているわけではないけども。

【備考】 類歌、類句が管見に入らない。散文に近い句というべきであろうか。法楽であり、また速詠であるという、

この百韻の性格も関係あるか。

(名残折・裏・二) ねがふてふ心は人に定まらで

九四 身ぞいにしへにあらずなりぬる

【校異】ぬる ②⑤ゆく ①④⑥行

【式目】雑(述懐) 身(人倫)

【語釈】○あらずなりぬる：以前のようではなくなりました。「うき身ぞとおもひそめつる心より袖の色さへあらずなりぬる」(統拾遺集・雑上・権中納言公雄・1239)。「むかしおもふ心はかりは身にそひて／老のすかたそあらずなりぬる」(菟玖波集・雑連歌四・2883／2884・高山上人)。

【付合】心に身を相對させ、二方向の考察を加えた形にしている。

【一句立】この身は、昔と同じではなくなりました。

【現代語訳】願うという思いは、それぞれの人により、どんなものか決まっているわけではないし、この身も、昔と同じではなくなりました。

(名残折・裏・三) 身ぞいにしへにあらずなりぬる

九五 老木さへ花は思ひやなかるらん

【校異】思ひ ⑦思ふおもふ

【式目】春(花) 老木(植物)

【語釈】○老木さへ：老木であつてさえ。「老木」で詠まれるものには、桜、松、梅などがあるが、ここは桜の老木。自己の心情を託している。「我ばかり盛すぎぬと身をすれば老木の花に春風ぞ吹く」(統後拾遺集・雑上・1001・源兼

氏)。「なからへぬるそ身のうらみなる／花さかぬ老木とともに朽もせて」(表佐千句第一百韻・54／55・紹永／宗祇)。○思ひやなかるらん：物思いはないのであろうか。

【付合】我が身の老いによる変化を思い、付句では、過ぎした時を共有しているものとして、桜の老木に思いを馳せ、自らの様と比較した思いを述べる。

【二句立】老木であってさえ、花には物思いはないのであろうか。

【現代語訳】この私の身は、昔とは同じではなくなり、今では老いてしまった。同じように桜も老木となり、昔と姿が変わっているが、老木となっても、花には、物思いがないのだろうか(憂いなどまったくないかのように美しい花が咲いていることだ)。

【考察】宗祇は例えば『表佐千句』で二度「老木」を詠んでおり、『老葉』にも「老木の花」を二句入れるなど、みずからをなぞらえ、心情を託す言葉として「老木の花」をしばしば使っている。

特に本百韻には、第十一句に「若木の松」があり(年はまだ若木の松のかたぶぎて)、若い松と自分を比べて、十二句で「わがよはひこそ思ひしらるれ」、十三句で「末とほく昔ちぎりし人もなし」と、自らの現在の境遇と思いを吐露する方向に句をすすめている。本句は第十一句といわば対になり、物思わぬ木々の姿から自らを振り返っている。十一句の時と同様、外見は年老い、心中に積年の様々な思いをかかえている自分と、年老いてはいるが、何の屈託もなく見える花を咲かせる桜の老木を対比している。

『愚句老葉』に入る「老木の花」の付合と自注を示すと、

一三六 とひすてらるゝ世をそ恨る

一三七 浅茅原老木の花に露落て

自 故郷などの老木の花の露けさはとひ捨らるゝことを、
花も身を恨なるへし

一三八 なくさめかたき此世也けり

一三九 古郷は老木の花に松の風

自 みる人も沈思し給は、愚意にやあひ待らむ、一年、

連歌合の前句也

いずれも故郷の桜の古木を通して、一三七は、かえりみられない故郷の寂しさを、一三九は、時移り人も去った故郷の景色にいわく言い難い感情を抱くことを表現しようとしている。

自己の中にあふれる追憶と憂愁の思いを描こうとする宗祇の心情が、この九十五句では、老木であっても、花はまるで何の憂いもなく咲いているようにみえるという言い方で反映されている。

（名残折・裏・四）老木さへ花は思ひやなかるらん

九六 大内山の風なのどけさ

【校異】なし

【式目】春（のどけさ）

【語釈】○大内山：内裏。「大内山トアラバ、内裏也。又仁和寺に此山の名あり。：松風（連珠合璧集）。「のどかにも吹きまさるかなこのへの大内山の千世のはるかぜ」（碧玉集・山・1020）。「君のためをこなふ法のよひく／＼に／＼ほうち山の月も見なれつ」（小鴨千句第十百韻・57／58・心敬／忍誓）。○のどけさ：静かで穏やかな様子。春の天候に使う。「ころよとき花に東の種もかな／春にまかする風の長閑さ」（寛正七年二月四日何人百韻・発句／脇・心敬／行助）。「うくひすさそふ風の、とけさ／氷とけてうちいつる波の谷の戸に」（新撰菟玖波集・春連歌上・37／38・式部卿邦高親王）。

【付合】花から目を転じて、静かで穏やかな内裏の風景を視野に入れた。

【一句立】内裏を吹く風ののどかなことよ。

【現代語訳】老木となっても、花は、物思いがないのだろうか（憂いなどまったく美しくないように美しく咲いていることだ）。そしてこの内裏を吹く風のなんとのどかなことよ。

（名残折・裏・五）大内山の風ののどけき

九七 白雲に春の麓の夜は明けて

【校異】ふもとの ⑤ふとの（「ふ」と「と」の間右傍に朱小字にて「も」とあり）⑥木の^{サイ}下

【式目】春 白雲（簞物）麓（山類・体）

【語釈】○白雲に：前句の大内山を、仁和寺の北にある御室山ととり、藤原兼輔詠などで大内山と縁の深い「白雲」を付けた。「白雲のこのへにたつみねなればおほうち山といふにぞありける」（新勅撰集・雑四・「亭子院、大内山におはしましける時、勅使にてまゐりて侍りけるに、ふもとよりくものたちのぼりけるを見てよみ侍りける」・中納言兼輔・265）。「このへにたつしら雲とみえつるはおほうちやまのさくらなりけり」（詞花集・遠山桜・24・先齋院出雲）。「春風わたる岩神の松／花ハ^山城なと大内山もちりぬらん」（文正二年正月一日名所独吟山何百韻・22／23・宗祇）。○春の麓：春の気配を見せる麓のあたり。御室山の麓には仁和寺がある。「やまたかみきたにたなひくかりのこゑ／はるのふもとはかすみこめつつ」（太神宮法樂千句第九百韻・41／42・宗長）。○白雲に：夜は明けて：空が白んでくると、これまで見えなかった白雲が目に見えてくる様子。「とを山の雲ま霧まに夜は明て／船てせよとや月はいる覧」（顕証院会千句第二百韻・3／4・原秀／忍誓）。「みなともうらも舟はゆく也／をくれしと旅人さはく夜は明て」（連歌百句付（天理本）・248／249）。「夜は明けて」は『菟玖波集』に多く見られる表現。

【付合】「大内山」を、仁和寺の北の御室山ととり、そこから「白雲」を付け、麓に立ち位置を変えた。

【一句立】白雲がかかり、山の麓の春の夜はあけていって。

【現代語訳】 大内山に吹く風はのどかなことだ。白雲が峰に立つという大内山に、白雲がかかり、麓の春の夜はあけていつて。

（名残折・裏・六） 白雲に春の麓の夜は明けて

九八 舟こぐ海に月おつるかげ

【校異】 こく ⑥とまる に ②も おつる ⑦おくる^歌 ⑧出る

【式目】 秋（月） 海（水辺・体） 舟（水辺・体用之外）

【語釈】 ○舟こぐ：夜明けと共に船出をする。（↓九七句）【語釈】 ○白雲に夜は明けて例句参照。） ○月おつる：月が沈んでいく。用例を見ると朝の言葉が同時に使われており、朝の情景に使う表現であることがわかる（↓【付合】参照）。「遠山もとの雨やのこれる／月おつる野中の木、の朝しめり」（宗砌句集・1039／1040）。「月おつる塩瀬のかたははるかにて／舟路のなみのあけわたるいろ」（小鴨千句第八百韻・29／30・心敬／量阿）。「かねうちなりて月おつるころ／うき別までしはしともいひわひて」（三島千句第五百韻・10／11）。

【付合】 山麓の明け方から、海上に情景を変えた。前句と合わせれば、東から日がのぼる明け方に、月が光を失いながら西の水平線上に沈んでいくのが見えることになる。このような月はほぼ十五夜前後の月であり、東から明るくなっていく空の中、白く丸い影が西の海に落ちていく光景となる。（国立天文台暦計算室「各地のこよみ」HP参照）

【一句立】 舟を漕ぐ海には、月が落ちていくその光が映っている。

【現代語訳】 白雲がかかる山の麓では、春の夜が明けていき、舟を漕ぐ海には、月が落ちていくその光が映っている。

（名残折・裏・七） 舟こぐ海に月おつるかげ

九九 忘れめやこの住の江の秋の暮

【校異】このすみの江の ①此住よしの ⑤このみの江の ⑥此住吉の江の

【式目】秋（秋の暮） 住の江（名所）

【語釈】○忘れめや…忘れることがあろうか。住吉の岸には忘草が生えるということをおまえて、自らは決して忘れるはずがないことを強調していると考えてよい。「忘草トアラバ、へわする、草ともいふ。是に二種あり。しのぶを忘草と云。又萱草を忘草といふ。住吉の岸のわかれば是也」…住吉と海土はいふともながるすな人忘草おふといふ也忠峯（連珠合璧集）。「かりねの野辺にさゆる山風／北まつりかけしあふひも忘れめや」（老葉（毛利家本（再編本））・597／598）。○住の江…摂津国住吉の入江。住吉神社のある海岸沿いの地域。現在の大阪市住吉区。「ながらへむ世にも忘れじ住吉の岸に波たつ松の秋かぜ」（新拾遺集・神祇・すみよしにまうでてよめる・伊勢大輔「住吉」は『榮花物語』では「住の江」。「夜もいまはあけのそほ舟漕出し／神かきしるきすみの江の月」（表佐千句第二百韻・51／52・専順／宗祇）。なお、宗祇には住の江の春の月を詠む発句がある。「夜るは月さそ住の江の夕かすみ」（下草・発句・住吉参籠の時、春月を・1272）。○秋の暮…秋の夕暮れ時、または秋の終わり。夕暮れ時もしくはそれ以降すぐに、月が沈むことになる場合、月齢が若く、新月からせいぜい三日月程度である。「秋になりぬ。（中略）五六日の夕月夜はとく入りて、すこし雲隠るるけしき、萩の音もやうやうあはれなるほどになりけり」（源氏物語・篝火）。「暮」は、秋の終わりであっても秋の夕暮れでも可能とは思われるが、九十七・九十八句での朝の風景を、九十八・九十九句で夕に転じたと考えておく。ただ、月を夕暮れ時とすると、月の姿はあるかなきかに細くなる。

【付合】住吉の浦の秋の夕暮れに、月が海に沈む情景を詠む。

【一句立】（住吉の岸には忘草が生えているというが）忘れることなどあろうか。この住の江の秋の暮れの景を。

【現代語訳】舟を漕ぐ海には、月が落ちていくその光が映っている。忘れることがあろうか、このすばらしい住の江の秋の夕暮れの景を。忘草が生えているといっても、決して忘れはしないのだ。

【備考】難波江の月のすばらしさを詠む歌として、新古今集、秋上、400番に、「八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月と

いふことを」として、宜秋門院丹後歌「わすれじな難波の秋のよはの空こと浦にすむ月はみるとも」がある。

(名残折・裏・八) 忘れめやこの住の江の秋の暮

一〇〇 なほ手向けおけ露の言の葉

【校異】 なを手向をけ露のことの葉 ③ことはの露をそふる手向ち（この句から線を伸ばして朱書）猶手向をけ露のことの葉④ことはの露をそふる手向路 ⑦ことはの露をそふる手向ち（この句から線を伸ばして朱書）⑧ことはの露をそふる手向路

【式目】 秋（露） 神祇（手向けおけ）

【語釈】 ○なほ手向けおけ：やはり捧げておきなさい。前句から、和歌の神である住吉の神に詩歌を捧げることになる。原文表記は「なを」であるが「なほ」に改めている。「手向けおく露のことの葉かずかずに神もあはれやかけてみるらん」（新後撰集・神祇・755・祝部忠長）。○つゆの言の葉：露のようにはかなく消えやすい言葉。露により美しく色づく木の葉も思わせるが、人が発する思いの言葉であり、神の前にはかなくうつろいやすいもの。和歌では三条西実隆が非常によく使う語句である。「いかにせん人の心の秋にあへば色かはりゆく露のことの葉」（菊葉集・恋二・237・従三位栄子）。「手向けても色ある物と目に見えぬ神もはつかし露のことの葉」（雪玉集・神祇・明応八年二月廿二日詠・6003）。「あきとほしふるえさかゆくよよのまつ／たむけかすそふつゆのことは」（太神宮法楽千句第一百韻・発句／脇）。「見るまゝにさなから月の心かな／ひかりをそへよ露のことの葉」（文明十二年独吟百韻「みるまゝに」・発句／脇・大内政弘（発句のみ）／宗祇）。

【付合】 秋に露をつけ、露によって美しく色づく木の葉のような言の葉を詠む。「秋の心、露」（連珠合璧集）。挙句の祝意を、歌の神へ句を捧げる行為で示すが、「露のことは」のはかなさは、神の前に人の所為として謙遜したイメージもある。なお、宗祇は、自らの連歌への思いは、最終的に住吉の神にこそ受け止めてもらうべきと考えているのだから。

【一句立】それでもやはり捧げるのだ、露のようなはかなく、またつたないものではあるけれど、我が願いの連歌の言の葉を。

【現代語訳】このすばらしい住の江の秋の暮れを、言葉にして詠まずとも、忘れることがあろうか（忘れはしない）。それでも、やはり住吉の神への手向けとして、捧げるのだ、露のようにはかなく、またつたないものではあるけれど、我が願いの連歌の言の葉を。

【備考】挙句の校異に関して、対校本のうち、京大平松文庫本（校異④）、大阪天満宮蔵長松本（同⑦）、天理図書館本（同⑧）は、挙句の一句全体が違い、大阪天満宮蔵延宗本（同③）は、挙句に櫻井本（底本）の挙句の形を朱で並記している。長松本⑦と延宗本③を比較すると、長松本の挙句には、「本ノマヽ」と右傍に墨書され、櫻井本挙句と思われる異形が存在を知っていたことをうかがわせる。長松本には、百韻の冒頭余白に朱の書き入れで「紹巴之筆記ニ此発句ハ春日之末社ニ左投之御前ト申アリ則此社ニテノ発句ナリト云々此筆記にハ光さし／そふ春日哉と見えたり」と、紹巴による百韻の子細記述と変化した発句の形が記されていた。また百韻冒頭に「文明八年四月十八日春左抛社法楽」^{イ本}「宗祇発句集前書云／左抛社法楽二」という朱の記述もあり、こちらは延宗本も「文明八年四月十八日春左抛社法楽」^{イ本}「宗祇発句集前書云左抛社法楽」と朱の書き入れとして冒頭部分に持つ。延宗本は、紹巴関係の記述は持たず、④⑦⑧伝本と同じ挙句に、底本の挙句の形を異本注記として記す。このように、よりおとなしい形の挙句が流布する余地があり、そうした挙句を持つ天満宮関係の伝本の周辺に関しては、さらに紹巴の関わりを記す伝本が流布していたと考えられよう。

奥書

此百韻は將軍家の御会にはしめて

めしくはへられ侍し時春秋 春日の

五十六歳

末社左抛の御前に祈念の事

ありて彼御社の名を発句の中に

かくして手向侍しを程へて後

独吟の功を三時に終侍しもおほよそ

この神にいのり申す事いさゝかその

よしある事になん

【校異】

① かぎりさへ似たる花なきさくら哉 此百員ト合卷也

奥書ニ云

此独吟二百員の内予五十二歳の時將軍家の御会ニ始而

被召出侍しニ祈念の為春日の末社左抛御前にして発句を

手向侍りき取分此神に申事子細有こと、その後百員ハ

予ことし七十九才三月廿日ちる花の面白に堪すしていひ捨

侍りしを其後一句二句なと付侍りてみれば更に心も

ほれ詞もむすほ、れ何のことほりもなく侍りしを

おもひ捨す月くをおくり侍なからしかもやむことを

得すしてなかは過ぬれはいかてか只にはとおもふ心斗にて

文月の末からうしてはたしぬ老の思ひのそのこと、

なきハもとよりさることなれと前の三時につかふまつりし

心をおもへははるか
の利鈍侍るへきにやさ
きの百員も
その内二句三句もよ
ろしきハ侍らねと猶
形もよき程
にや侍らん中へこれ
を便として此道をお
もひとまる
へくこそ

②④⑤⑦⑧奥書なし

③ 祇翁自筆巻物ノ奥ニ

予五十六の時 將軍家御会ニ始而

被召加侍りし時祈念のために春日

末社左抛御前発句を手向侍りき

取分此神申事子細あるとこそ

トアリ

⑥ 此百韻ハ宗祇内裡へめさるへき

頃臆せしとの祈念と云々

【語釈】○將軍家御会：文明八年正月二十八日に行われた、將軍家の連歌会。足利義尚の発句、二条持通の脇。連衆は、足利義尚の他、二条持通、青蓮院尊応、実相院増運、日野勝光、聖護院道興、細川政国、杉原伊賀守賢盛、杉原長恒、明智政宣、山科言国ら（『言国卿記』）。○春日の末社左抛：春日神社の末社である左抛社。（↓「櫻井本『春日左抛御前法衆独吟百韻』訳注（二）付「春日の末社左抛」考」附載の「春日末社左抛」考」において考察した。）

○三時：約六時間。連歌作品の詠出時間の表記を見ていくと、例えば後に宗長の享祿四年十一月二十五日夢想独吟

「明ぼのの」では、「五時」のうちに詠んでいる。

【現代語訳】

この百韻は、私宗祇が、將軍家の連歌御会に初めてお召しを受けお加えいただきました時に、年齢は五十六歳、春日社の末社左抛社の御前にて祈念することがあり、御社の名を発句の中に隠して捧げましたが、しばらくしてから、独吟して約六時間で詠み終ええましたものです。そもそも、この神に祈り申し上げる事は、いくらかその理由があることでした。

【補説】奥書に関する部分については、『春日左抛御前法楽独吟百韻』の伝来―報告と考察―（愛知県立大学日本化学部論集第11号「2020.3」）にて考察した。ただし、⑥付載の一文に関しては、その内容の相違から奥書の伝本系統に関する考察の対象としなかった。

【訳注引用文献典拠一覧】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学蔵貴重連歌資料集一』（平成一三・臨川書店）（連歌新式、新式今案共に）による。『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合は、木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

【語釈】等における和歌の引用は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』（CD-ROM版を使用し、本文は断らない限り『新編国歌大観』CD-ROMによる。『草根集』は日次本（『新編私家集大成』所収書陵部蔵御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

小鴨千句…古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収小松天満宮本

- 万葉集抄：『万葉学叢刊中世編』（昭和三・古今書院）所収竹柏園A本
『古今集註』：『日本歌学大系別巻四』
- 顕証院会千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文庫本
熊野千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本
三島千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収鶴見大学本
河越千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫本
年次不詳「春深し」何人百韻：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
至徳以前「ゆきませの」何路百韻：『連歌百韻集』（昭和五〇・汲古書院）
芝草内連歌合（天理本）：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）
老葉（再編本）：『連歌大観一』
- 愚句老葉：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）
老葉注（頼原文庫本）：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）
長祿三年千句：『大山祇神社 法楽連歌上下』（昭和四五・愛媛大学古典叢刊行会）
大和物語：『日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（昭和四七・小学館）所収天福本
宗砌句集：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）
太神宮法楽千句：日文研連歌DB
- 連歌百句付（天理本）：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）
竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）
菟玖波集：『連歌大観一』
- 新撰菟玖波集：『連歌大観二』
- 寛正七年二月四日何人百韻：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）
心玉集：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）
看聞日記紙背何人連歌「うのはなは」（永享九年四月二十五日）：日文研連歌DB

春日権現験記絵：『春日権現験記絵 注解』（平成一七・和泉書院）

兼載雑談：『歌論歌字集成第十二巻』（平成一五・三弥井書店）

看聞日記紙背何船百韻「あきかせの」：『図書寮叢刊看聞日記紙背文書・別記』（昭和四〇・養徳社）

八雲御抄：『八雲御抄の研究 枝葉部 言語部 本文編・索引編』（一九九二・和泉書院）

文正二年正月一日名所独吟山何百韻：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）

下草：『連歌大観一』

文明十二年独吟百韻「みるまに」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）

年次不詳何人百韻「春深し」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）

宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収城崎温泉寺蔵本

【参考文献】

両角倉一『宗祇連歌の研究』第五章第二節『万葉集』の享受（昭和六〇・勉誠社）

本訳注は、JSPS 科研費 JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。